

大学ラグビーにおける選手獲得戦略

トップスポーツマネジメントコース
5015A324-2 山下 大悟

研究指導員 平田 竹男 教授

1. 背景

学生スポーツの一つの特色として選手の流動性が高いことが挙げられる。プロスポーツと違い一人の選手の在籍期間は高校では3年間、大学で4年間と限られるため、常に勝ち続けるには、戦略的な選手獲得（リクルーティング）が欠かせない。

また、学生スポーツにおけるリクルーティングは、各大学によって入試制度が異なるため、選手の獲得方法も様々である。

関東ラグビー対抗戦において優勝を経験した大学は1997年の2グループ制導入以降、早稲田、帝京、明治、慶應、筑波の5校のみであり、この5校は一度も2部リーグであるBグループに降格していない。

これら5校はどのようなリクルーティングを行い常に優勝争いをする成績を残してきたのだろうか。

先行研究を見てみると、大学スポーツのリクルーティングはアメリカの全米体育協会（以下、NCAA）のスポーツを対象に多くの研究がされている。

日本では、リクルーティングの研究としては、九州の一流高校選手の進路決定要因を調査した浅沼ら（1993）が存在するものの、大学スポーツのリクルーティングに焦点を当てた研究は、筆者が早稲田ラグビー蹴球部を対象にしたものに留まる。

2. 目的

本研究は早稲田、帝京、明治、慶應、筑波の入試制度及び選手獲得状況を明らかにすることで、大学ラグビー選手のリクルーティングに関する問題を探索することを目的とした。

3. 研究手法

早稲田、帝京、明治、慶應、筑波の5大学のラグビー部を対象各大学の選手獲得に関連する入試形態および入学した選手の背景と出身校を調査した。

3.1 入試形態調査

各大学関係者へのインタビューにより、2013年度の入試形態を調査した。

3.2 選手獲得に関する量的調査

2004～2013年に各大学のラグビー部に入部した全選手の入学年度、出身校、ポジション、ユース代表経験、在学期間中の関東ラグビー対抗戦出場時間を調査しデータベース化した。

そして、対象期間内に10人以上部員を輩出している高校を「部員輩出校」、各年度の総出場時間上位23人を「戦力要員」と定義し、10人以上戦力要員を輩出している高校を「戦力要員輩出校」とした。そして、各高校の輩出数と戦力要員の比を「戦力要員輩出率」とした。

とした。

さらに一元配置分散分析により、分析フォワード（FW）とバックス（BK）プレイヤーそれぞれの部員獲得数について大学間の経年変化を、一元配置分散分析により、全期間を通してのユース選手の獲得数比較を行った。

4. 研究結果

4.1.各大学の入試形態

入試形態には、スポーツ推薦制度、AO入試制度、附属系属校からの推薦枠、一般入試、外国人留学生があった。

各大学の入試形態とそれぞれの定員を表1に示す。

表1 各大学の入試形態概要

	早稲田	帝京	慶應	明治	筑波
スポーツ推薦(目安)	2人	25人	0	19人	5人
その他の推薦	自己推薦	AO入試			
附属・系属高の有無	○	○	○	○	×
外国人選手の獲得	×	○	×	×	×
総獲得人数(目安)	30～40人	35人	40人	20～25人	15～20人

4.2.各大学の選手獲得の状況

対象期間中に早稲田大学が獲得した選手は374人、出身高校は109校、FW、BKの獲得割合はFW53%、BK：47%であった。帝京大学は同様に、407人、142校、FW、BKの獲得割合はFW：55%、BK：45%であった。慶應義塾大学は同様に、402人、80校、FW、BKの獲得割合はFW：53%、BK：47%であった。明治大学は310人、86校、FW、BKの獲得割合はFW：57%、BK：43%であった。筑波大学は211人、100校、FW、BKの獲得割合はFW：52%、BK：48%であった。

FW・BKともに獲得数の経年変化において大学間で差があった。（FW：F(4,48)=12.768， $p<.01$ 、F(4,48)=12.967， $p<.01$ ）

4.3.戦力要員輩出率

早稲田大学は、早稲田実業28%、桐蔭学園75%、國學院久我山80%、早稲田大学高等学院10%、常翔啓光学園167%、千種80%、東福岡267%であった。

帝京大学は、御所実業120%、伏見工業79%、佐賀工業63%、荒尾111%、京都成章111%、長崎南山47%、鹿児島実業273%となった。

慶應義塾大学は、慶應義塾39%、桐蔭学園123%、國學院久我山96%、慶應志木33%、小倉180%、清真学園69%、長崎北220%となった。

明治大学は、明大中野7%、常翔学園144%、國學院久我山83%、明中八王子28%、大分舞鶴73%、日向200%となった。

筑波大学は福岡 181%、桐蔭 217%、茗溪学園 130%、長崎北 275%、日川 200%となった。FW、BK の獲得割合は FW : 52%、BK : 48%であった。

4.3. ユース代表選手

ユース代表選手の獲得人数に関しては早稲田の 47 人が最多で、次に明治の 44 人と続き、この 2 大学が他の大学を獲得人数においては大きく引き離す結果となった。帝京は 3 番目に多い 24 人であり、慶應大学が 21 人、筑波大は 12 人に留まるという結果となった。

次に 5 大学の 4 年間のユース代表選手所属人数の推移を調査した結果が図 1 に示す。

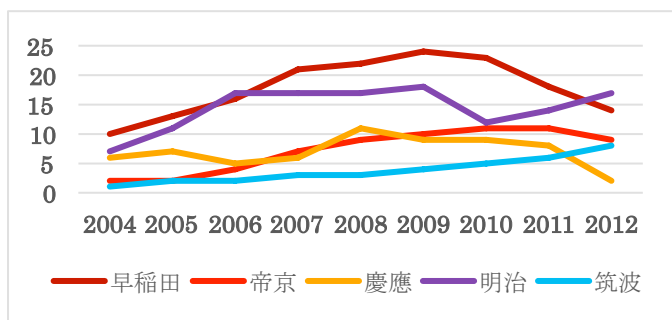


図 1 大学別ユース代表選手所属人数の推移

ユース代表選手獲得数を比較したところ、大学間で有意差が見られた($F(4,60)=6.549$, $p<.01$)。

多重比較によれば、「慶應」と「早稲田」($p<.05$)、「筑波」と「早稲田」($p<.01$)、「筑波」と「明治」($p<.01$)において有意差があった。

ユース代表選手のポジション別獲得割合で 5 大学を比較すると、慶應は BKR、筑波は LO、明治は PR、早稲田、帝京は BK3 とそれぞれの大学で最も獲得しているユース選手の割合が高いポジションが異なるという結果となった。

5. 考察

5.1 選手獲得

5.1.1 ユース代表選手の獲得

早稲田は優勝時にユース代表選手が 10~20 人所属しており、ユース代表選手が多数存在することによって結果を残していた。ユース代表経験選手の獲得がリクルーティングで重要となることが今回の研究でも示された。

帝京のように抱えるユース代表が 10 人、毎年 2~3 人の加入であれば結果が残せ、かつ連覇が可能なことが証明された。以上の点から、ユース代表選手の単純な獲得人数だけではなく、質も影響されることが考察できる。

ユース選手が戦力要員として活躍しているかについて検討し、ユース代表の約 56%が戦力要員となることが分かった (Max61.5%、Min 49.2%)。ポジション別の比較では、明治が FW に重点を置いてリクルーティングをし、戦略となっていることが推察され、戦略的スカウティングを行っていることが示唆された。

ユース代表経験者で 1 年生からプレーできていたの

は 0.86 人であった。この事実を認識し長期展望を持った戦略的リクルーティングをおこなうべきである。

5.1.2 強豪校からの獲得

有望選手が多くいると考えられる強豪高校からの選手獲得はリクルーティングでは重要な要素である。帝京は新興強豪校から多くの部員及び戦力要員を獲得していた。一方、他大学は伝統的強豪から戦力要員を多く得ていた。チームの勝利のためには無名校との新たな関係構築もリクルーティングには必要かも知れない。

5 校の戦力要員となった選手のうち、戦力要員輩出率 200%を超える高校は 6 校に限られていた。そして 6 校のうち、4 校は九州に存在する高校であった。多くの高校を訪問し情報網をはり選手を発掘することは大学ラグビー部指導者として重大な業務となるだろう。

5.1.3 部員輩出校と戦力要員輩出校

主な輩出校は 5 大学でほとんど重なっていなかった。この事実は高校毎に進学しやすい大学があるということを表していると考えられる。つまり、高校と大学の指導者間の信頼関係が構築されているところに進学しやすいということを裏付ける結果である。

早稲田と慶應には附属校という他大学との違いがあった。附属校がある大学は内部進学等で部員を得やすく入部人員が多いため、附属校の強化を促すことによって大学チームの強化でも役立つと考えられる。

5.2 入試形態の違い

5.2.1 スポーツ推薦枠の定員

入試形態の違いにより選手獲得枠が大幅に違っていたため、全ての大学がスポーツ推薦制度を元に同じようにチームを強化することはできないことがいえる。早稲田や慶應は自己推薦入試や AO 入試によって選手が何人取れるかわからないため、不確定要素を考慮して強化の方針を立てていかなければならない困難さが伺えた。帝京、明治は推薦獲得枠が多くリクルーティングには優位な入試制度であった。

5.2.2 内定時期

リクルーティングには時期が影響していた。結果より、セレクションの時期で最も優位な大学は帝京と明治であることが考えられる。帝京と明治はセレクションを比較的早い時期の 6 月に行い、また獲得枠も多いため、他の大学と比較して優秀な選手を多数確保する機会がある。他の大学は 6 月以降にセレクションを行い、獲得枠も小さいため、選手選抜の機会が小さい。

6. 結論

本研究により、リクルーティングの問題点として、ユース代表選手の戦略的な獲得、新興校も含め勢力地図が絶えず変化する強豪高校との連携、入学後出場しない人数の多い輩出高校の存在、附属校との効果的な連携、外国留学生の獲得の 5 つがあることが明らかとなった。